博 士 論 文

ヨルク・シュマイサーの＜変化シリーズ＞研究

－多版多色刷り銅版画技法の潜在的特性と表現の発展性について－

論文要旨

平 成 27 年 度

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

小 野 修 平

筑波大学

本研究は、世界的銅版画家ヨルク・シュマイサー（Jörg Schmeisser　1942－2012　ポメラニア・シュトルプ：現ポーランド領）の作品群の中でも、＜変化シリーズ＞と呼ばれる、三部に分かれて制作された合計 21 作品を研究対象とし、以下の目的の達成を目指すものである。

“＜変化シリーズ＞全２１点を、テーマ・技法・素材の関係性と、一連の表現展開・制作背景から多角的に分析・考察し、そこに見出されたシュマイサー独自の表現から、本作品群が示す多版多色刷り銅版画技法の潜在的特性と表現展開の関わり、この二つの在り方を明確にする。”

本研究論文は序章と結章を含む 7 つの章に分かれる。＜変化シリーズ＞に関する資料の収集と分析から研究の必要性を把握し、対象作品の実見調査を行うことで、彼の用いた独自の色彩、版の使い方、作品の展開方法を調査した結果をまとめ、全 21 作品のデータベースを作成した。その上で、各作品に描かれた内容や、そこから見えてくるテーマ性、版という表現手段と作者の関わり方などを分析・考察した。さらにシュマイサーと関わりの深かった銅版画家・ギャラリスト・刷り師へのインタビュー、加えて現代に活躍する多版多色刷り銅版画家、それぞれの視点から捉えた＜変化シリーズ＞の見解をまとめることで、この作品群の価値を広く多角的に見い出している。

第 1 章ではまず、国内外で収集したシュマイサーに関する文献を軸に、彼の生涯を旅と作品制作の視点からまとめることで、総合的な略歴を著わしている。続いて銅版画における多版多色刷りの歴史と仕組みから、刷りとマチエールの関係性に焦点を当て、各種技法書に記された（シュマイサーを含む）著名作家の見解と筆者の実践を比較した。この表現によって得られるマチエールの違いとして、刷り取られたインクを個別に乾かしながら刷りを重ねるか、乾燥を待たずに連続して刷りを重ねるか、以上の 2 点から考察を進めている。また、2012 年、町田市立国際版画美術館にて開催された「静かな詩情　銅版画の色と光」展を取り上げ、様々な表現の展開をみせる今日の多版多色刷り銅版画を、分版によるイメージと色彩の分解方法から大きく 5 つに分類した。この展覧会で出品された、＜変化シリーズ＞を含む、代表的 5 人の作家に焦点を当て、作品と共にその分版の方法を分析する事で、シュマイサーの版の使い方がどういった点で独自性の高いものかを明確にした。最後に、こうしたシュマイサー作品の独自性を根底から支える、画材・色彩・技法・刷り・版の使い方、以上の 5 点から分析した。この調査では、シュマイサーが日本において利用した車木版画工房における実地調査と、刷り師：長野剛の協力のもと行われた実践を元に、

制作者でもある筆者の視点から行った実験制作も加え、結果をまとめている。

第 2 章では≪変化Ⅰ・シリーズ≫7 作品の図版の掲載と各作品の解説を行った。結果、7 作品中 3 作品（4 種のエディション）を実見調査することが出来た。その中で、現在、作品集等掲載されているオリジナル版とは異なった、2 種類のバリエーションを新たに発見することが出来た。全作を通して 9 種の版を使用して制作された≪変化Ⅰ・シリーズ≫は、通常の多版多色刷り銅版画技法で例えると、17 枚の版を使用する作品制作である。独立した版の構成による作品は存在せず、どの作品も全作、或いは前々作、≪変化Ⅰ－４≫に至っては前前々作の版が使われる事で構成されていた。それは、全ての作品に親子関係が成り立っており、互いの遺伝子を含みながら生み出されているということになる。この、多版多色刷り銅版画でなければ絶対に成し得ず、その常識を覆す方法は、シュマイサーが≪変化Ⅰ・シリーズ≫で最初に到達した革新的表現であることを強く述べた。

第 3 章では≪変化Ⅱ・シリーズ≫7 作品の図版の掲載と各作品の解説を行った。結果、7 作品全作品を実見調査することが出来た。そのなかで、現在、作品集等掲載されているオリジナル版とは異なった、1 種類のバリエーションを新たに発見することが出来た。さらに、7 作品の中で 5 つの版が≪変化Ⅰ・シリーズ≫からの転用であること、そのうち 1 つの版は加筆・修正を繰り返しながら 3 つの作品に再利用されていたことが判明した。こうした≪変化Ⅱ・シリーズ≫の調査結果として、前シリーズの系譜を物理的に版としても、間接的にイメージとしても引き継ぎながら、新たなテーマをそれぞれの作品に盛り込んだ事を挙げた。それは「波」・「炎」・「風景」などの自然物を始めとした、タイトルにも込められる直接的“変化”以外の要素である。こうする事で、作品一つ一つの独立性が高まり、表現の展開もより自由度が増していた。それに反して、版の加筆としての“変化”ではなく、ある意味無理やりにでも≪変化Ⅰ・シリーズ≫の版を取り入れようとする修正・消去としての“変化”が特徴であることを述べた。その最たる例として、以前の要素がほとんど残っていない≪変化Ⅱ－炎≫「版 A3」や、最終的に切断された可能性のある≪変化Ⅱ－振り返る≫「版 B5/6」を挙げた。この“版 B”を筆頭に、今回≪変化Ⅱ・シリーズ≫で再利用された版は全て≪変化Ⅰ・シリーズ≫から転用された版であった事を強調した。これらを総合的に考察すると、新たな要素を取り入れようとしながら、以前の要素もなかったことにはしたくないという、シュマイサーの葛藤の様な感情が、作品全体を通して見て取れる作品群であったことを述べた。

第 4 章では≪変化Ⅲ・シリーズ≫7 作品の図版の掲載と各作品の解説を行った。結果、7 作品全作品を実見調査することが出来た。この調査では、前 2 シリーズのように、異なった作品間、またはシリーズを介しての版の再利用は認められなかったが、基本 7 作品に加え 1 種のステートと、1 種類のバリエーションを新たに発見することが出来た。≪変化Ⅲ・シリーズ≫の調査を通した結果として、全作品を一堂に掲載できた事に加え、技法・色彩・刷り順などのデータベースを作成できた事は、大きな成果であると考える。また、≪変化Ⅲ－文書と記憶≫におけるルネサンス期の絵画からの影響や、≪変化Ⅲ－キモノ≫に残された落款の意図するところなどを解読・考察できた事は、新たな発見の一つである。先にも述べたように、≪変化Ⅲ・シリーズ≫で迎えられたもっとも大きな変化は、異なったシリーズ・作品間での版の再利用という表現手段を、全く用いなかったことである。その結果、前二シリーズに見られた緻密な計算と描写から生まれる多版多色刷りではなく、速写性の強い描写を生かした作品群となっている。これまでに用いられていた根源的イメージの形態が、一度は姿を消したものの、≪変化Ⅲ－新旧の期待≫以降新たに登場するが、版を再利用していない分、その位置関係と展開は自由になることで、一つ一つの変化が作品の世界観に重きをおく柔軟性に富んだ表現となっている。つまり「過去の版を用いない」というある種の制限は、彼を“囚われる変化”から“開放的変化”へと向かわせたと言える。その結果、連続した 7 作品で見せる変化というより、個々の作品の力強さが増すことへと繋がっていることを強く述べた。

第 5 章では、＜変化シリーズ＞全作品を通して、そのテーマ性・技法的考察・シュマイサーの人物像などから、総合的且つ多角的な視点で考察を行う事を目的とした。そのため、彼を良く知る友人（銅版画家：中林忠良）・彼の作品を長く取り扱うギャラリスト（ギャルリー宮脇：宮脇豊、ギャラリーサンセリテ：野尻眞理子）・同じ時代に活躍し、今尚その第一線で活躍する多版多色刷り銅版画家（馬場章、安藤真司）、以上の分野から 5 名に協力を頂き、筆者が直接インタビューを行った。それぞれが異なった視点から捉えるヨルク・シュマイサーと＜変化シリーズ＞についてまとめることで、この作品群の考察を深めた。中林忠良の見解からは、同じ分野を志す親しき友人であり、“版”と向き合う一人の人間として、シュマイサーの偉大さを知る事が出来た。宮脇豊・野尻眞理子、両者の見解からは、作品の深き理解者として“変化”の根幹にある、シュマイサーが見たであろう版とそれを取り巻く世界の捉え方を考察する事が出来た。馬場章・安藤真司、両者の見解からは、作家としてそれぞれが追求する多版多色刷り銅版画の可能性と魅力に加え、同技法に従事する作家の目線から見た＜

変化シリーズ＞を比較する事で、シュマイサーが残した表現の可能性を広く見出すことが出来た。

結章では、これまでの調査研究総括として「ヨルク・シュマイサーの＜変化シリーズ＞21 作品によって明示された、多版多色刷り銅版画技法の潜在的特性と表現展開の関わり、その在り方」を、以下の結論によって導き出した。

“制作過程の途中経過の形として残される役割であったステートが、鑑賞するに十分な作品であることを、多版多色刷り銅版画技法の潜在的特性を生かした独自の展開によって明示した上で、一つのイメージの痕跡は、版や色との関わり方次第で如何様にも変化するという表現展開の在り方を、一連の流れで体現した。”

本結論の解説は、まず大前提として≪変化・Ⅰ、Ⅱシリーズ≫における、多版多色刷り銅版画技法の潜在的特性を生かしたシュマイサー独自の展開は、革新的表現技法として今後さらに評価されるべきであることを述べた。その上で、＜変化シリーズ＞はその革新的技法として、最も展開した場所が表現の始点となり、徐々にそれを用いない事で、スタンダードに立ち返りながらも描かれた内容は奔放さを増し、絵として 1 点 1 点がより見ごたえのあるものへと変化していった事に、この作品表現の根幹があると述べた。それは、この一連の流れに、“何で表現するのではなく何を表現するのか。”という、シュマイサー自身が抱えたであろう、技法と表現（テーマ）の関わりにおける問いと、三部作を通したその問いに対する答えの双方秘められているという考察である。この逆比例的・技法と表現の交わり方は、芸術の価値は必ずしも高度な技術のみによるものではない、原点こそ、発展する事への無限の可能性を秘めている、という、シュマイサーの強いメッセージのようにも受け取れる事を述べ、＜変化シリーズ＞によって明示された、多版多色刷り銅版画の表現展開の在り方であるとした。

また、本論最後に、本研究の課題として、3 つの点を挙げた。1 つ目は今回発見することが出来なかった≪変化Ⅰ・シリーズ≫残り 4 作品の実見調査と異なったバリエーションの継続的収集調査、2 つ目は版の実見調査、最後は＜変化シリーズ＞の作品内に記された文書の解読である。これら 3 点を継続的シュマイサー研究の課題として、今後とも取り組んでいきたいと考えている。

以上が、本研究論文の要旨である。